

ピアーキの最期

——クライスト『拾い子』について——

時 田 郁 子

1 はじめに

ハインリヒ・フォン・クライスト (Heinrich von Kleist, 1777-1811) は、『こわれ甕 (Der zerbrochne Krug)』(1806) や『ペンテジレーア (Penthesilea)』(1808)、『ハイルブロンンのケートヒェン (Käthchen von Heilbronn)』(1808) 等の劇作家として知られ、さらに『ミヒヤエル・コールハース (Michael Kohlhaas)』(1810) や『O公爵夫人 (Die Marquise von O...)』(1810) 等の散文作品により名文家として高い評価を受ける。クライスト文学の重要テーマの一つに正義があり、『拾い子 (Der Findling)』(1811)¹⁾ の主人公も正義を追求した結果、死刑となる。彼が絞首台で最期を迎える姿は破局的にも見えるが、正義を追求する本人はそう考えない。これには主人公の思想の変化が関係する。

『拾い子』では、アントーニオ・ピアーキが、商用で出向いた街ラグーザで病気の孤児を拾い、成長した拾い子と妻の不貞と思しき現場を押さえる。妻はこのときのショックが引き金になって亡くなり、ピアーキは拾い子に全財産を奪われると、拾い子を殺して、死刑になる。家長が後妻と息子の不貞を発見する構図は、バウマンによると、マッテオ・バンデッロ (Matteo Bandello, 1485-1561) の『短編小説集 (Novelliere)』(1554) の第44話、フェッラーラ領主のニコロ三世 (1383-1441) が後妻と息子の不貞を発見して二人の首をはねた逸話に基づくという²⁾。この逸話と比較して、『拾い子』には、子どもを拾う前提があり、拾い子が妻の想い人とうり二つであるという偶然が働き、不貞発覚後に家族三人の人生が急展開する、という特徴がある。本稿では、拾い子の役割を特徴づけ、主人公夫婦と拾い子から成る家族という共同体を分析する。

それらを踏まえて、すべてを失ったピアークが復讐の鬼と化し、死へ赴く過程を考察して、作品内で主人公の最期にどのような意味が隠れているのかを明らかにする。

2 鏡像としての「拾い子」

まず、ピアークがニコロを「拾う」経緯を見ておく。ローマの土地ブローカー、アントニーオ・ピアークは一人息子のパウロを連れて商用でラグーザに赴いた。ちょうどこの頃、街では疫病が流行っており、彼は安全を考えて引き返すことにする。そこに一人の少年がやってきて、両親が疫病で亡くなった病院に連れて行かれそうだから助けて欲しいと、ピアークに懇願する。ピアークは断ろうと思うが、少年がその場で卒倒したため、馬車に乗せる。一行は街に連れ戻され、パウロが疫病に感染して亡くなり、ピアークが失意のうちにローマ行きの馬車に乗り込むと、ニコロが別れの挨拶をする。

ピアークは、突然身を乗り出して、とめどもなく溢れる涙のために途切れがちな声で、君も私と一緒に行くか？と彼に尋ねた。少年は、老人の話を理解するやいなや、頷いて、はい、是非そうしたいです！と言った。そして、少年を乗車させて構わないだろうか？というブローカーの問いに対して、病院の責任者が微笑んで、この子は神の子ですし、彼がいなくて困る者はおりません、と請け負うと、ピアークは、大きな身振りで少年を持ち上げて、車内に入れ、自分の息子の代わりにローマに連れて帰った。(S.200)

ピアークは、跡取りの一人息子を亡くして悲嘆に暮れていた最中、孤児のニコロを「自分の息子の代わりに」引き取ろうと思いつく。彼が帰宅後に妻に経緯を説明すると、妻のエルヴィーレは「自分の前に馴染めずぎこちなく立っているニコロを胸元に抱き寄せて、パウロの寝ていたベッドに寝ようニコロに示し、パウロの衣服すべてを与えた」(S. 201)。数週間後にピアーク夫妻がニコロを正式に養子に迎えたため、ニコロは名実共にパウロの「代わりに」なる。この作品の舞台となる時期は作品内から特定することはできないのだが、ラグーザが中世都市とし

て12-15世紀に栄え、また黒死病が頻発するのが14-15世紀初めであることから、14-15世紀頃と想定してみよう。「古代ローマ時代に多く存在した養子縁組は、血のつながりが重視されるようになる一二世紀以降のイタリアでは、ほとんど見られない。」³⁾ それにもかかわらずピアーキが養子縁組をするのは、跡取りを失った商人として家を存続させる必要があったからである。彼はニコロに教育を施して跡取りに仕立てることにするが、パウロが死ぬ原因を作った張本人を養子にする背後には、ニコロの策略も働いている。ニコロは両親を疫病で亡くして、頼りになる身寄りがなかった。彼は、自分も病気に感染しながら、疫病の蔓延する街から逃げようとして、ピアーキ親子に目を付けた。困難はあったが、彼は目論み通り脱出に成功し、パウロが亡くなったおかげで、裕福な家の一人息子の座を手に入れる。ニコロは、ラゲーザからローマに向かう馬車の中でパウロが座るはずだった席に座り、ローマの家ではパウロが寝ていたベッドに横たわり、パウロの衣服を着る。彼は、パウロの「代わりに」、学校に通い、仕事の手ほどきを受け、エルヴィーレの姪と結婚して、ピアーキ家の財産を引き継ぐことになる。ニコロという名は、バンデッロの逸話に登場するニコロ三世を連想させるだけでなく、商人と旅人の守護聖人であるニコラウスに由来するため⁴⁾、ピアーキの見立て通り、ニコロが有能な商人になることは必定である。

ここで、ニコロがピアーキに引き取られる場面に戻り、彼が「神の子(Gottes Sohn)」と言われた点に注目しよう。一般に「神の子」はキリスト教文化圏においてイエス・キリストを指す。もちろん「病院の責任者」は身寄りのない孤児という意味でこの語を用いたのだが、この語を手掛かりにして、ニコロのラゲーザ脱出をキリストの復活に関連づけた。キリスト教信仰において、キリストは十字架上で死んだ後蘇ったと信じられる。ニコロは、疫病に感染して半ば死んだ状態から回復して、ラゲーザという死の世界からローマという生の世界へ移動して、蘇った。他方、パウロは、ローマからラゲーザへ、つまり生の世界から死の世界に移り、そのまま亡くなった。ニコロとパウロは、年格好も同じであり、対称的な移動を経て、生の世界における居場所と死の世界における居場所を交換しており、鏡像関係にあると言える。

ニコロは鏡像としての性質を持ち合わせており、その性質はまずパウロに向かって発揮され、彼が成長するのに伴い更なる展開を見せる。ニ

コロは結婚した後、家族に内緒で、ジェノヴァ騎士の扮装をして愛人ザビエラと謝肉祭に行った。彼が夜中にこっそり帰宅すると、義母エルヴィーレと鉢合わせになり、彼女は卒倒する。その理由は、後になって判明するのだが、仮装したニコロの姿がエルヴィーレの想い人の今は亡きコリーノにそっくりだったためである。

コリーノは、かつてエルヴィーレの実家の織物工場が火事になったとき、逃げ場を失った彼女を助け出したジェノヴァの騎士であり、救出劇の最中に頭部を損傷し、3年の闘病生活の後に亡くなった。エルヴィーレは彼の闘病生活に付き添い、最期を看取った。その2年後に、彼女はピアーキと結婚する。彼女は寝室に等身大のコリーノの肖像画を飾り、普段は、その絵を布で覆っているが、彼女は寝る前に絵に向かって話しかける。その様はほとんど礼拝であり、マンはこれを「エルヴィーレ・ピアーキの魂の不貞」⁵⁾と呼ぶ。

ジェノヴァ騎士の扮装をしたニコロは、肖像画のコリーノにうり二つである。ニコロは、生身の人間としてのコリーノではなく、キャンバス上の彼にそっくりであり、キャンバスを鏡と見立てると、彼らも鏡像関係にある。シュレーダーは、ニコロが「神の子」と呼ばれるのは、エルヴィーレがコリーノを神格化して崇め立てることに関係すると指摘する⁶⁾。彼女にとって窮地にあった自分を救い出してくれた騎士は、生と死の境から生の領域へ連れ戻してくれた救い主に他ならず、自分を犠牲にして彼女を救ったコリーノの姿はまさに「神の子」であった。そのため、ニコロの仮装した姿は、エルヴィーレの目に「神の子」の出現と映っており、ニコロは意図せずして、「神の子」さながらに、死者コリーノを蘇らせることになった⁷⁾。その後、彼が偶然、表面にアルファベットが書かれた六つの積み木 (NICOLO) をコリーノ (COLINO) という順番に並べ替えると、エルヴィーレはそれを見て失神する。このとき彼女は積み木に「神の子」の啓示を見たのだと考えられる。

その後、ニコロは愛人問題のために家庭内で行き場を失うと、エルヴィーレを逆恨みするようになり、彼女の過去を探って、コリーノの存在に行きつく。彼は、彼女に復讐すべく、ピアーキの留守中に、謝肉祭の時と同じジェノヴァ騎士の扮装をして彼女の寝室に忍び込む。

彼は恥ずべき欲望で神経を鋭くして、完全に計算していた。それと

いうのも、エルヴィーレが、しばらく経って部屋に入り、いつものように静かに穏やかに服を脱いで、ニッチを覆う絹のカーテンを開けて、彼の姿を目にしたとき、彼女は、コリーノ！大好きな人！と叫んで、床の羽目板に気を失って倒れたからである。ニコロはニッチから出てきた。彼は一瞬、彼女の魅力的な姿に見入り、死神にキスされて突然青ざめた彼女の華奢な姿をとっくり眺めた。(S.212)

この日もエルヴィーレはいつも通りコリーノ礼拝を始める。先だってニコロが部屋の外から礼拝の様子を見たとき、「彼女は恍惚の姿勢で、誰かの足下に身を投げ」(S.207)、「愛の抑揚を伴って、ささやき声でコリーノと口にする」(ebd.)とあり、彼女は服を脱いだ後、いつものように肖像画にうっとりとして話しかけるはずだった。だが彼女はカーテンの後ろに控えていたニコロを目にして、コリーノが蘇ったと思う。彼女が「コリーノ！大好きな人！」と叫んで失神するのは、驚愕したからではなく、恍惚のためなのである。ニコロは彼女を「偽聖女」(S.207)、「徳の化身さながらに歩き回る女性」(S.209)と悪意を持って表現したが、彼女は周囲から徳の高い婦人と見なされている。だが、コリーノ礼拝を行う彼女の姿は、昼間の姿とはかけ離れている。彼女が礼拝中に恍惚に陥る様子は、中世の女性神秘主義者たちが神と合一する体験を連想させる。女性神秘主義者たちの多くは修道女で、エルヴィーレ同様、聖女ないし徳の化身と見なされていたが、修道院の独房で体験した合一の様子は性愛のそれに近似する⁸⁾。エルヴィーレのコリーノ礼拝は、「神の子」コリーノとの合一を目指しており、「魂の不貞」というマンの表現は的を射ている。コリーノがニコロの姿で現れたとき、彼女の願いは叶った。ニコロの目に失神した彼女の姿が「魅力的」に映るのはそのためである。その一方で、彼女は「死神にキスされた」ようとも記され、コリーノ＝ニコロとの合一体験は彼女を死の世界に近づける。

ニコロは、鏡像としての性質を持つために、まずパウロの代わりとして、次いでコリーノの代わりとなり、「死者の代理人」⁹⁾として生きている。彼は、エルヴィーレのコリーノ礼拝に乱入したとき、意図せずしてコリーノを蘇らせており、「死神」に等しい働きをした。彼の「生まれながらの虚弱体質」(S.214)も、彼が死の世界と縁があることの証になる。ニコロは、死者の「代わり」として生の世界を生き、死者を擬似的

に蘇らせており、生と死の境界線上にいる存在なのである。

3 家族あるいは「不幸な人」たちの共同体

ピアーキがニコロを拾ったのは、跡取りのパウロを失った後、家を存続させるためであった。彼の家に関する考えを理解するために、当時の家族観を踏まえる必要がある。14-15世紀のイタリアでは、血縁・縁故関係を重視する家族集団としての中世的な家族が解体し、情愛に基づいた夫婦を中核に置く近代的な家族が形成されつつあった¹⁰⁾。ピアーキがニコロと出会ったとき、彼の息子パウロは11歳、ニコロがパウロと同年代であるとする、ニコロは21歳で結婚するので、物語開始時と結末の間には約10年の距たりのがある。また、ピアーキは60歳の誕生日を迎えた後、ニコロ夫妻に財産の大半を譲ることから、ピアーキが50歳、エルヴィーレが18歳、ニコロが11歳のときに、この三人家族が始まったと判明する。途中ニコロが結婚してコンスタンツェが家族に加わるが、彼女はすぐに亡くなるため、ピアーキ家は再び三人になる。ピアーキとエルヴィーレ、ニコロはどのような家族関係を築き、それがどのような経緯で崩壊するのか。

まずピアーキとエルヴィーレの夫婦関係を確認しよう。エルヴィーレは、ジェノヴァの裕福な織物工場主の娘であり、13歳のときに実家が火事になった後の3年間、コリーノの実家である伯爵家で過ごした。彼女がコリーノ礼拝の際に「大好きな人！」と呼びかけるため、二人が相思相愛であり、婚約していたような印象を与えるが、商人の娘と貴族の息子が結婚する可能性は極めて低く、エルヴィーレは看護人として仕えていたと考えられる。一方、ピアーキは商人として伯爵家に入入りした折に、エルヴィーレと知り合っており、妻を亡くした時、息子を養育し、家を切り盛りする妻を求めて、エルヴィーレを思い出したのだろう。こうしてコリーノの死の2年後、ピアーキとエルヴィーレは結婚する。彼らは、32歳の年齢差があるにもかかわらず、仲睦まじく暮らしている。エルヴィーレが「彼の若くて優れた奥方」(S.201)と記されることもそれを裏付けるが、彼女が密かにコリーノ礼拝を続けていることに目を向けると、この夫婦関係の歪さが浮かび上がる。岡本氏は、エルヴィーレが結婚当初に熱病に罹ったのは、ピアーキに対する拒絶反応であり、彼

女が「この老人から子供は望めない」(S.201)のは夫婦関係がないためと指摘する。その一方で、コリーノ礼拝を行うとき、「彼女の部屋は、彼女の欲望がむき出しになる空間」¹¹⁾になる。エルヴィーレは、夫の理解と庇護の下で、コリーノ礼拝を続け、自分の親戚と親しく行き来して、自由に振る舞う。二人の関係は、夫婦というよりも、保護者と被保護者に近い。それというのも、二人の結婚はローマの土地ブローカーとジェノヴァの織物工場主の家同士の結びつきであり、中世的な家族観に基づくからである。その10年後に、跡取りのニコロとエルヴィーレの姪のコンスタンツェが結婚するのも、両家の結びつきを強化するためである。ピアーキとエルヴィーレは互いに敬意を持っているが、ここに夫婦間の情愛はない。彼女はピアーキ家を構成する要素として迎えられただけであり、ニコロが迎えられた事情とほとんど違わない。しかも、ニコロはピアーキ夫妻が新婚の頃に迎えられており、エルヴィーレとニコロはほぼ同時期にピアーキ家に来ている。

ピアーキは、最初の妻の「代わりに」エルヴィーレを妻として迎え、跡取り息子パウロの「代わりに」ニコロを養子にして、「代わりに」家族を結成し、家の存続を図った。彼は商人として合理的に考え、家の存続に必要な人材を集めたのである。彼の合理主義について、南氏は次のように述べる。「ピアーキは、あくまでも自分の発想からのみ判断を下している。彼の生は、法と契約を基盤とした近代社会の典型的な生であり、合理的で一貫している。しかし作品において彼をとりまく世界は、人物は、悉く非合理的で、彼の発想を超越している。」¹²⁾ 事実、ピアーキはエルヴィーレとニコロを法に則って、それぞれ妻と子として家族に迎えており、各人はそれぞれ期待される役割を果たせばよい。ただし、彼は合理的であるために、「似非信心 (Bigotterie)」を極度に嫌い、ニコロがカルメル会修道院に入り浸ることに眉をひそめる。もちろんニコロは信仰心に燃えているのではなく、司教の愛人のザビエラに夢中になっているだけであり、ピアーキは、修道僧たちがピアーキ家の遺産相続人であるニコロを手なずけて財産を狙っていることに気づき、嫌悪感を隠さない。このように彼ら三人が表面上平穏な生活を送るなか、エルヴィーレは死者崇拜を行い、ニコロは「似非信心」の人たちとの交際のうちつつを抜かしており、合理的なピアーキの世界と正反対の非合理的な世界に浸っている。エルヴィーレが頻繁に失神し、ニコロが虚弱体質で

あることは、彼らが生の世界で「死者の代理人」として細々と生きていることの証拠でもある。シュレーダーの指摘通り、ピアーキ家では「死者たちが生者よりも生き活きとして」¹³⁾ おり、死者たちが生者の優位に立って、生者を操っている。ニコロの非合理的なものへの志向もまた、父に向けられる「代わりに」「似非信心」に、母に向けられる「代わりに」女性に向けられており¹⁴⁾、ニコロがピアーキに刃向かう際の原動力も代理のものに過ぎず、彼の生者としての存在感は限りなく薄い。

ではこの家族を結びつけるものは何か。血縁や縁故でなければ、情愛でもない。ピアーキが合理的精神に則って、妻と子の役割の担い手としてエルヴィーレとニコロを集めたとしても、彼らはピアーキの合理性とは無縁なままである。ここで、作品内で三人がそれぞれ一度だけ「不幸な人」と表現される点に着目したい。三人に共通する「不幸な人 (unglücklich)」とは何を意味するのか。

最初に「不幸な人 (der Unglücklichen)」(S.202) と呼ばれるのは、エルヴィーレである。彼女は謝肉祭の晩に廊下で仮装したニコロを見かけて失神し、「不幸な人」と表現される。

ニコロは、驚愕して青ざめ、振り返って、この不幸な人を助けに行こうと思った。だが、彼女が立てた物音がきくと老人を呼び寄せるに違いなかったので、老人から叱責を受ける心配が他のすべての考えを押し潰した。彼はうろたえつつも奮闘して、彼女がいつも身につけている鍵束を腰から奪い、ぴったり合う鍵を探し出して、鍵束を広間に投げ返して、姿を消した。(S.204)

ニコロは、エルヴィーレが暗闇に人がいたことに驚いて失神したと理解し、自分が原因でエルヴィーレが倒れたとわかっていても、ピアーキに怒られたくないという子供じみた考えを優先して、彼女を放って、その場から逃げ出す。彼女が「不幸な人」と呼ばれるのは、ニコロの視点に依る。だが、コリーノの礼拝者であるエルヴィーレは、ジェノヴァ騎士に扮したニコロをコリーノと見なし、コリーノが現れたことを喜んでおり、このとき恍惚状態にあった。したがって、ニコロの理解は間違っている。それでも彼女が「不幸な人」であるとするならば、それは彼女が死者コリーノに呪縛されて、普段から「心に悲しさを抱えた静かな表

情」(S.202)で生きており、そのことに気付かないからである。

次いでニコロが「不幸な人 (des Unglücklichen)」(S.206) と呼ばれる。彼は、妻のコンスタンツェが出産時に子供と共に亡くなった直後に、6年来の愛人であるザビエラと逢い引きしようとした。そのとき偶然にもピアーキが、ザビエラの侍女が家の中にいることに気付いて、事態を把握する。ピアーキは、コンスタンツェの葬儀を急遽、当日の深夜に決行することにし、ザビエラのサインをしたための偽の手紙を書いて、ニコロを葬儀の場に呼び寄せる。そこでニコロが誰の葬儀かと尋ねると、ピアーキは「ザビエラ・タルティーニ」と答えて、二人の関係を知っているかと仄めかし、ニコロがいないかのごとくコンスタンツェの葬儀を執り行って、喪主を勤めるべきニコロの役割を取り上げた。

彼をひどく恥じ入らせたこの出来事は、不幸な人の胸に、エルヴィーレへの燃え立つ憎しみを呼び起こした。それというもの、彼は、老人が皆のいる前で自分に加えた侮辱は彼女のせいだと考えたからである。(S.206)

ニコロが「不幸な人」と呼ばれるのは、妻の葬儀の場で侮辱されたことを恥と受け止めたためであり、妻子を失ったためではない。とはいえ、コンスタンツェの死は出産によるものであり、夫にして胎児の父であるニコロも関与している。ニコロは恥をかかされて「不幸」だと考えたが、むしろ、彼自身が妻子に死をもたらしたことに無自覚である点で、「不幸」なのである。事実、作品全体に敷衍して見ると、彼は、まずパウロに、次いでコンスタンツェと胎児に、エルヴィーレに、自分に、そしてピアーキに、次々と死をもたらす。それは、彼が死者の代わりとして生と死の境界線上にいるからである。

ピアーキ夫妻とニコロの対立は、前者を善、後者を悪とする道徳的観点から考察しうるが¹⁵⁾、「悪／災い (das Übel)」という語に着目すると、三者が「悪／災い」に振り回されている構図が浮かび上がる。作品内で最初に「災い」(S.199) と呼ばれるのは、ラゲーザの疫病であり、ニコロが「災い」から回復した一方で、パウロはそのために亡くなったため、ニコロは間接的にパウロに「災い」をもたらしたと言える。南氏は「ニコロの“Übel” に憑かれた人間は、死すべき運命に至る。強者はこれ

に感染しないが、弱い者はこれに感染して死去する。」¹⁶⁾と述べる。「弱い者」とはパウロとコンスタンツェを指し¹⁷⁾、彼らはその通り亡くなり、「強者」に見えるピアーク夫妻も「災い／悪」には叶わない。彼らは、ニコロの悪癖である「似非信心」と女性関係のうち、後者の「悪 (das Übel)」(S.200)を根絶やしにするべく、彼をコンスタンツェと結婚させたという。ここではニコロの女好きが「悪」と呼ばれる。だが、ニコロが結婚後も愛人と交際しており、「悪」は根絶やしにされていない。それは、妻の死後、「情熱 (Leidenschaft)」(S.205)と言い換えられると、今度は愛人に向かうのではなく、義母のエルヴィーレに対して屈折した形で現れる。彼がこれを「エルヴィーレへの燃え立つ憎しみ」と理解し、エルヴィーレへの復讐計画を練り始めるからである。「悪」は最初に疫病としてニコロに入り込み、彼の内部に蓄積して、彼を操るようになり、妻、そして義理の両親に猛威をふるった後、最終的に彼も死に追いやる。このように「悪」は生者を死の世界に送り込む力になっている。ニコロが「悪」に操られる姿は、エルヴィーレが死者に操られているのと同じであり、彼らの「不幸」はここにある。

最後に「不幸な人 (den Unglücklichen)」と呼ばれるのは、妻エルヴィーレを失い、「拾い子」ニコロを殺して、死刑を言い渡されたピアークである。彼は、死を直前にした者に与えられる「罪の許し」(S.215)を断固拒否する。関係者たちは彼の心を翻そうと様々な試みを行うが、ピアークはニコロを殺したことを悔いておらず、殺人の罪を許されたくないと考える。

すぐに、処刑を中止して、法に守られた不幸な人を再び牢屋に戻す必要があるとわかった。続く3日間同じ試みがなされて、その都度同じ結果となった。3日目に、再び彼が絞首台に結ばれず、はしごを下りなくてはならなかったとき、彼は憤怒の形相で両手をたかだか掲げて、自分を地獄に行かせてくれない、非人間的な法を呪った。(S.215)

ピアークはもともと「似非信心」を極度に嫌っており、さらにニコロがカルメル会の修道士たちの助けを借りて、法に則った形でピアークから財産を取り上げたため、キリスト教会に対して強い反感を抱いている。

彼は、罪を背負ったまま死のうとする人間を放っておかない、キリスト教会の法を「非人間的」と見なす。彼は、この「非人間的な」法に縛られていることを嘆き、そのために「法に守られた不幸な人」となる。この点でピアーキは、エルヴィーレとニコロが自分の状況を自覚しないゆえに「不幸な」のとは一線を画している。

とはいえ、ピアーキとエルヴィーレ、ニコロは三人とも「不幸な人」と呼ばれ、傍から見れば「不幸な」最期を遂げる。彼らは、約10年にわたりピアーキ家を存続させる間、血縁や情愛によってではなく「不幸な人」たちの共同体を成していたのである。

4 共同体と個人

ピアーキが仕事や家庭内でイニシアティブを取るのは、12-16世紀のイタリアで見られた「父権」、すなわち「自分の子ども——とりわけ息子——と直系の男系子孫に対して家父長が行使する絶対的・恒久的な権限」¹⁸⁾に依る。そのため、60歳になったピアーキがニコロ夫妻に財産のほとんどを譲与した後でも、ニコロは習慣的にピアーキの機嫌を伺う。彼は、妻の葬儀の場で侮辱された件に関して、ピアーキではなくエルヴィーレを恨む。彼は、コンスタンツェ亡き後も財産を保持するためにピアーキに取り入る一方で、ピアーキの目の届かないところでエルヴィーレに対する復讐計画を進めていく。

ニコロは、復讐のためにエルヴィーレの過去を探り、彼女に罠を仕掛けるうちに、彼女に魅惑されることになる。彼がコリーノに扮して、エルヴィーレの寝室に忍び込み、失神した彼女をベッドに運んでキスをしていると、予定より早く帰宅したピアーキが寝室に入ってくる。

ニコロは雷に打たれたかのように立った。彼は、自分の破廉恥な行為をどうしても誤魔化せなかったので、老人の足下に身を投げ出して、二度と再び奥様の方へ目を向けませんと誓い、許しを請うた。すると実際、老人は穏便に済ませようという気にもなった。だが、ならず者の腕に抱かれ、この者に驚愕の眼差しを投げかけて意識を取り戻したエルヴィーレが発したいくつかの言葉が彼を唾然とさせたので、彼は、彼女が休んでいるベッドのカーテンを閉じて、壁か

らただ鞭を取り、ドアを開いて、すぐに出ていく道を指し示した。
(S.213)

これは、ニコロ三世が後妻と息子の不貞を発見する場面と同じであるが、家長の対応が異なる。ピアーキが腹を立てるべきところで、「穏便に済ませようという気にもなった」のはなぜか。それは、21歳で男やもめとなった息子が28歳の義母に、しかも妻の叔母に恋情を抱くのは自然の情として仕方がないとしても、徳の高い妻が義理の息子と不貞を犯すはずがないと彼が確信していたからである。だが彼はエルヴィーレの言葉を聞くと、「啞然と」して、即座にニコロを追い出す。シュレーダーはエルヴィーレが口にした言葉はニコロを愛の対象にするものではないかと推測する¹⁹⁾。もちろんエルヴィーレは、コリーノが肖像画から出てきて自分を抱きかかえていると思っており、ニコロをニコロとして認識していない。したがって、彼女が意識を取り戻す過程でニコロに向かって愛の言葉を囁いたとしても、それはコリーノに向けられたものである。だがピアーキは言葉尻を捉えて、二人が不貞を働いていると勘違いしたのである。このとき、コリーノという死者が三人を混乱させ、ピアーキの合理的世界に非合理的な世界が入り込んだ。ピアーキが即座にニコロを追放しようとするのは、不貞を断罪するためのみならず、自分の合理的世界を守ろうとしたためでもある。しかし、ニコロが開き直って、法的に財産はすべて自分のものであると断言し、逆にピアーキを追い払う。ピアーキはあまりの言い分に「啞然と」して、馴染みの顧問法律家にして友人の元に相談に行く。こうしてピアーキとニコロの形勢は逆転する。ピアーキは瀕死の妻を抱えて友人に世話してもらい立場になり、ニコロはザビエラと結婚の約束をし、修道僧たちの助けを得て、ピアーキ家の財産を法律上正式に手に入れることに成功する。

ピアーキは、それまで土地ブローカーとして商売を繁盛させており、法を巧みに利用してきた。彼にとって法は合理性を凝縮する信頼に足るものであったが、跡取りの「拾い子」の裏切りにあい、全財産を奪われて、法に足を掬われた。ここで法に対する彼の態度は変化する。不貞を発見する場面でピアーキは「啞然として／無言で (sprachlos)」(S.213) 鞭を取り、法律家の家に着くと「一言も発しないうちに」(ebd.) 倒れ、誰にも気付かれないほど静かにニコロを殺す。岡本氏はこれらに見られ

るピアーキの沈黙が特異であると指摘する²⁰⁾。法は言葉で構成されるものであり、ピアーキは法を頼りに商売を行い、財産の譲与を行った。それは彼が法を定める共同体に信頼を寄せていたからである。だからこそ彼は、共同体の法を信用せず、法を踏み越える行為である殺人を行うとき、言葉を発しない。彼は共同体の法に背を向け、共同体の一員であろうとする意志を失う。その後、罪人とされた彼は、「罪の許し」というキリスト教会の法を押しつけられても、それを拒否して、次のように言う。

俺は天福に与りたくない。俺は地獄の奥底まで行くつもりだ。俺はニコロを、奴は天国にいるはずがないのだから、再び見つけて、ここでは不完全にしか達成できなかった復讐を再び始めるつもりだ！
(S.214f.)

ピアーキはもともと非合理的なものを嫌っていたが、天国は生前善人だった人間が赴いて天福に与る場所、地獄は生前悪人だった者が行く場所と考えており、死後の世界観に関して、キリスト教会の枠内にいる。そのため彼は、キリスト教会の法に従えば、殺人犯も罪を許されて「天福に与る」ことができるとうわかっている。それまで「善良な老人」(S.199)と見なされてきた人物が、「拾い子」に裏切られて、妻と財産を取り上げられた事情を鑑みるならば、彼が自分の行為を悔いれば、「拾い子」を殺した罪は許される。だがピアーキは「罪の許し」を頑なに拒否する。彼は、ニコロは極悪人であり地獄にいるはずだから、「地獄の奥底まで行き」、ニコロに復讐し続けたいと言う。彼は、「ならず者」(S.213)であるニコロが天国へ行くはずはなく、地獄にいるはずだと言い、そこで自分がニコロに苦しみを与え続けると宣言する。彼が天国で二人の妻と息子に会うことよりも、地獄で鬼になろうというほど、「拾い子」に憎しみを向けるのは、ニコロがピアーキの価値観を破壊したからである。ピアーキは、ニコロを投げ倒して、頭を壁に打ち付けて殺した上、彼を両膝で挟み、財産はニコロのものとする旨の通達書を彼の口に突っ込んでおり、残酷な復讐を果たした。だが彼はそれを「ここでは不完全にしか達成できなかった」と言う。彼にとってニコロは単なる裏切り者の「拾い子」ではなく、彼が共同体から離れるときの最後の

枷になる。このときピアーキは共同体に同化した存在から個としての自覚を持つ存在と化しており、ニコロへの復讐を完遂して、共同体に決別しようとする。そのため、彼は、共同体に不請不請留め置かれる限りで「不幸な人」であるが、ニコロを追いかけのべく絞首台に立つとき、「不幸な人」ではない。

短編小説『拾い子』は、「司祭は誰も彼に付き添わず、彼は静寂に包まれて、デル・ポポロ広場で縄を外された。」(S.215)という一文で締めくくられる。「司祭は誰も彼に付き添わず」という部分は、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749–1832) の『若きウェルテルの悩み (Die Leiden des jungen Werther)』(1774) の末尾の文「聖職者は誰も彼に付き添わなかった。」²¹⁾を真似たものであり、ウェルテルの自殺が教会で許されないのに対し、ピアーキが敢えて教会の法に決別したことを強調する仕掛けになっている。死刑囚となった彼に救いの手を差し出した人々も、自分達の共同体を越えて行こうとするピアーキを許さない。それでも彼は意志を貫き、自分の信念に基づいて行動する。彼は、家の存続を重視し、法を上手に使う、家の存続に努めてきた。ニコロを「拾った」ために、家が解体し、それまで信頼してきた法が自分を脅すものになると、ピアーキは自分のみを頼りにして処刑台に立つ。最後の瞬間に、彼は、共同体の法ではなく、価値判断の基準を「私 (Ich)」に移して、共同体の枠から抜け出た。こうして彼の最期は、「私／自我」を中心とする近代的人間と共同体の新たな可能性を示すものになる。作品内でニコロとコリーノの名がアナグラムとして効果的に用いられた点を考えると、クライストが主人公アントーニオ・ピアーキの名前のうち、「アントーニオ (Antonio)」の末尾にイタリア語の「私 (io)」を、「ピアーキ (Piachi)」にドイツ語の「私 (Ich)」を順不同に潜ませたことは明らかであろう。ピアーキは、拾い子に家族という共同体を壊され、それと同時に共同体の法への信頼を失ったことにより、「私」を意識するようになり、「私」に重点を置く近代人の端緒となった。

注

- 1) Heinrich von Kleist: Der Findling. In: ders: Sämtliche Werke und Briefe. (Hrsg.) Helmut Sembdner, München 2001. S.199–215. 以下、本書からの引

用はページ数を記す。

- 2) Hans-Heinrich Baumann: Kleists > Findling < und die Parisina-Novelle des Bandello. Bemerkungen zur intertextuellen Dynamik. In: Brandenburger Kleist-Blätter 13. Frankfurt am Main/Basel 2000. S.457-475. Hier S.458f.
- 3) 齊藤寛海・山辺規子・藤内哲也編：イタリア都市社会史入門—12世紀から16世紀まで、昭和堂、2008、134ページ。
- 4) Günter Oesterle: Der Findling. Redlichkeit versus Verstellung—oder zwei Arten, böse zu werden. In: (Hrsg.) Walter Hinderer: Kleists Erzählungen. Stuttgart 1998. S.157-180. Hier S.160.
- 5) Thomas Mann: Heinrich von Kleist und seine Erzählungen. In: ders: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Bd. IX, 2. Aufl. Frankfurt am Main 1974. S.823-842. Hier S.835.
- 6) Jürgen Schröder: Kleists Novelle >Der Findling<. Ein Plädoyer für Nicolò. In: Kleist-Jahrbuch 24. 1985. S.109-128. Hier S.119.
- 7) シュレーダーは作品内に三通りの蘇り——ニコロがコリーノを蘇らせること、ニコロがエルヴィーレを生に連れ戻すこと、ニコロが自分を発見すること——があると論じるが、本稿では、作品内でエルヴィーレは亡くなるまで観照的生を営んでおり、ニコロは自己認識に到達することはないと捉えるため、一つ目の蘇りのみを考察することとする。Vgl. Schröder: a. a. O., S.119.
- 8) Vgl. Gustav René Hocke: Die Welt als Labyrinth, Manier und Manie in der europäischen Kunst. Hamburg 1957, S.184ff.
- 9) Schröder: a. a. O., S.114.
- 10) 前之園幸一郎：イタリア・ルネサンス期における伝統的家族の解体と子どもへの新しいまなざし、青山学院女子短期大学紀要 51、1997、S.17-41。18ページ参照。
- 11) 岡本雅克：人間の根源に潜む暴力—ハインリヒ・フォン・クライストの『拾い子』について—、成城大学共通教育論集 6、2014、S.125-141. Vgl. S.130.
- 12) 南勉：ハインリッヒ・フォン・クライストのノヴェレ『拾い子』について—“Übel”を中心として—、島根大学法文学部西洋文学・語学教室、1980、S.335-346. Hier S.338.
- 13) Schröder: ebd.
- 14) Schröder: ebd.
- 15) Oesterle: a. a. O., S.163ff.
- 16) 南：上掲論文、S.336f。
- 17) 南：上掲論文、S.339。

- 18) 齊藤・山辺・藤内編：上掲書、S.133。
- 19) Schröder: a. a. O., S.113.
- 20) 岡本：上掲論文 S.135。岡本氏はピアーキの沈黙を暴力に結びつけて論じるが、本稿では、ピアーキの沈黙を法との決別と見なすことにする。
- 21) Johann Wolfgang von Goethe: Die Leiden des jungen Werther. In: ders: Werke, Kommentare und Register. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Band 6. Romanen und Novellen I. München 1996. S.124.